

I サムエル7章1～17節「主にのみ仕えなさい」

受難日礼拝、イースター礼拝を献げることができ、主イエス・キリストの十字架とよみがえりに思いを向けることができ感謝でした。今日の箇所にも、主の御業を記念として覚えること、それによって主への信仰に堅く立つことを見ることができます。

1. 20年後（：1～4）

イスラエルはペリシテ人との戦いに敗れ、主の箱を奪われてしまいました。しかし、主の箱はイスラエルに戻りました。主の箱が移動する一連の出来事の背後に確かに主の御手が働いていました。主の箱はキルヤテ・エアリムのアビナダブの家に運ばれ、彼の息子エルアザルが主の箱を守るために聖別されました。

こうして主の箱はその場所にとどまって、20年も経ったとあります。本来なら主の箱は幕屋の奥の至聖所に置かれるはずですが、そのまま放置されてしまったのです。しかも3節に記されているサムエルのことばからすると、イスラエルの民は異国の神々、偶像の神々に頼っていたようです。イスラエルは士師記の時代のように、「それぞれが自分の目に良いと見えることを行っていた」という状態でした。

その間のサムエルの様子については書かれていません。民の霊的な闇を暗示しているかのようです。しかし、「イスラエルの全家は主を慕い求め」るようになりました。そして、サムエルが表舞台に戻るのです。

3節。サムエルは悔い改めるように民に迫りました。悔い改めるとは主に立ち返ることです。そのことを説明して、三つのことが命じられています。一つ目は偶像を取り除くこと、二つ目は心を主に向けること、三つ目は主にのみ仕えることです。この三つのことを行うことが悔い改めです。

そうすれば主はペリシテ人の手から救い出してくださいとお願いします。神様は悔い改める者、ご自身の民を抑圧者の力から救い出して、ご自身との交わりに入れてくださいます。これが聖書全体で語られている救いです。

4節の「バルヤアシュタロテの神々」というのは、当時のカナンや周辺で拝まれていた偶像です。代表的な神と女神をあげてすべての偶像を指しています。すべての偶像を取り除くようにとサムエルは命じました。

このことは私たちに対しても主が命じておられることです。様々な宗教はもちろん偶像です。それだけでなく、宗教的なものでなくても、私たちそれぞれにとって偶像となるものがあります。偶像とは人がそのために時間とエネルギーを惜しみなく費やしているもののことであり、その意味で偶像とは自分の欲望そのものです。

人が自分の欲望に仕えることをやめて、本当に仕えるべきお方に仕えるようになることが救いです。そのお方は人を造られた創造主、永遠のお方、唯一のまことの神、主です。すべての偶像を取り除き、心を主に向け、主にのみ仕えるなら、本当に幸いな生涯となるのです。

4節。イスラエル人はサムエルが命じた通りにしました。こうして、士師記のパターンで言うと背教、抑圧、悔い改めへと進みました。その後の救出はどのようになされるのでしょうか。

2. ミツパで（：5～12）

サムエルは「全イスラエルを、ミツパに集めなさい。私はあなたがたのために主に祈ります」と言います。その呼びかけに応じて、イスラエル人はミツパに集まりました。6節。

彼らは悔い改めました。「水を汲んで主の前に注ぐ」という行動は、この文脈では「断食する」と同じように、悔い改めて主の御前に集中して祈ることを表したことでしょう。

ところが、イスラエル人がミツパに集まっていることを聞いたペリシテ人がイスラエルに向かって上って来ました。これを聞いてイスラエル人は恐れしました。その時、イスラエル人はどうしたのでしょうか。

8節。イスラエル人の悔い改めが本物であったことが分かります。彼らは主に頼りました。主こそご自身の民を敵の手から救い出してくださいと信託しました。

同じように信仰者は悔い改めた後も、常に神の救いの御業に頼る必要があります。

サムエルは民の求めに応じて、全焼のささげ物を主に献げて、イスラエルのために主に叫びました。とりなして祈りました。その間にもペリシテ人の軍勢は近づいて来ている緊迫した中での祈りでした。

すると主はその祈りに応えてくださいました。ペリシテ人の軍勢の上に大きな雷鳴をとどろかせ、彼らをか

き乱しました。その混乱に乗じてイスラエル人はペリシテ人を打ち負かし、追い払うことができました。

悔い改めてご自身に信頼するイスラエルを主が救い出してくださいました。そこで、サムエルは主の救いを感謝して、記念として一つの石を置きます。12 節。

「ここまで主が私たちを助けてくださった」という信仰と感謝を込めて、その石を「エベン・エゼル」と呼びました。「助けの石」という意味です。後になってもこの石を見るときに、主がここまで助けてくださった、場所的にも時間的にも主が特別の助けを与えてくださったことを思い出すことができるようにしたのです。

この教会の 50 周年記念誌のタイトルはここからとられました。私たちの今の歩みの中で何か問題に直面するときの一つの助けとなるのが、過去にあった主の恵みを思い起こすことです。過去にあった大切な転機、それを記念するものがあれば、そのときにあった主の御業、勝利、祝福を思い起こして、今の歩みにも主の助けがあることを確信し、主に信頼することができるようになるでしょう。そのような「助けの石」を私たちもそれぞれの信仰生活の中に置くことができると良いと思います。

3. サムエルの時代（：13～17）

この後、サムエルが活動している間、ペリシテ人は二度とイスラエルの領土に入って来なかったということです。「主の手がペリシテ人の上ののしかかっていた」とあります。主がサムエルを用い、イスラエルを守ってくださいました。主の御支配はイスラエルにあり、また敵にも及んでいます。

さらに主の守りがあったことが分かります。14 節。ペリシテ人は 5 つの町の内、エクロンとガテはイスラエルの領地に近いところにありました。その地域は元々はイスラエルの領土であったということです。ペリシテ人が奪い取っていたのですが、サムエルの時代にはイスラエルに戻ったということです。

また、アモリ人とは、ここではイスラエルがカナンの地に入る前からいた先住民のことを広く指しているようです。イスラエルの領地の中にそのアモリ人が住んでいました。その異教の民族が問題になる時もあるのですが、サムエルの時代には「イスラエルとアモリ人の間には平和があった」ということです。

ですから、サムエルの時代には、イスラエルは外的にも内的にも主によって守られて安定していたということです。

そのイスラエルの安定の鍵になっていたのがサムエルの働きです。15 節に「サムエルは、一生の間、イスラエルをさばいた」とサムエルの生涯の働きを一言でまとめています。彼は毎年、ベテル、ギルガル、ミツパを巡回しました。その 3 つの町はそれぞれ、これまでのイスラエルの歴史の中で重要な出来事があり、この後もそうなる町です。そして、それぞれに「聖所」が設けられていたことが分かります。シロに代わってそれらの町にイスラエルの民が集まり、主を礼拝し、会合がもたれました。そして、サムエルがその礼拝と会合において中心的な役割を持ちました。また、毎年その 3 つの町を巡回した後、サムエルは出身地のラマにある自分の家に帰りました。彼はそこにも「主のために祭壇を築い」てイスラエルをさばいていたとあります。

ですから、サムエルがイスラエルをさばいたというのは、民が心を主に向け、主にのみ仕えるように導いたことです。イスラエルはサムエルのリーダーシップのもとで主に対する信仰と信頼を保つことができました。また、イスラエルをさばいたということには、モーセのように、民の間の問題に対して主の律法に基づいて実際的な解決を促したということもあったと思います。

私たち教会にも、主への礼拝を中心として、立てられているリーダーシップのもとで主への信仰と信頼を保っていくように、主が恵みを与えてくださいます。主が教会に牧師、役員などを立てて、教会の皆さんが祈り支えることで、主への信仰と信頼を保っていくことができます。みことばを基準として共に聞き従うことで一致を保ち、主の祝福をいただいくことができます。

私たちも悔い改めて、主にのみ仕えていきましょう。主が祈りに応えてくださり、御業を行ってくださったときには、助けの石を置いて、主の救い御業を記念しましょう。そして、折に触れて思い起こし、信仰を新たにしましょう。主が選び立てている教会のリーダーシップを皆さんで祈り支え、教会がみことばに聞き従って、主にある一致を保って、主にのみ仕えていくことができるように、新年度の初めの主日に、思いを新たにしましょう。